

0. 背景

現在の学校教育に過剰適応した人材は、理論知識が多くあっても、就活では評価されず、業務遂行能力も低い場合が少なからずある。この対策の一つとして、成績重視ではなく、コミュニケーション能力重視の採用が行われているが、この趣旨に誤解が多い。

1. 問題点

コミュニケーション能力に関して、採用側と就活学生側で、以下のような認識のずれが生じている。

<採用側の観点>

今後の業務遂行時には、学問知識を生かしてしかも人間関係が豊かという両面の力を求めている。理想は図1に示すリーダー型を求めている。コミュニケーションには学問知識の適用、説明力を含む。

- ・対人スキル
- ・学問知識の説明・活用能力

<就活側の観点>

対人スキル重視で、特に面接の対応重視で考える。また、友達付き合いなどでコミュニケーション能力をPRする。

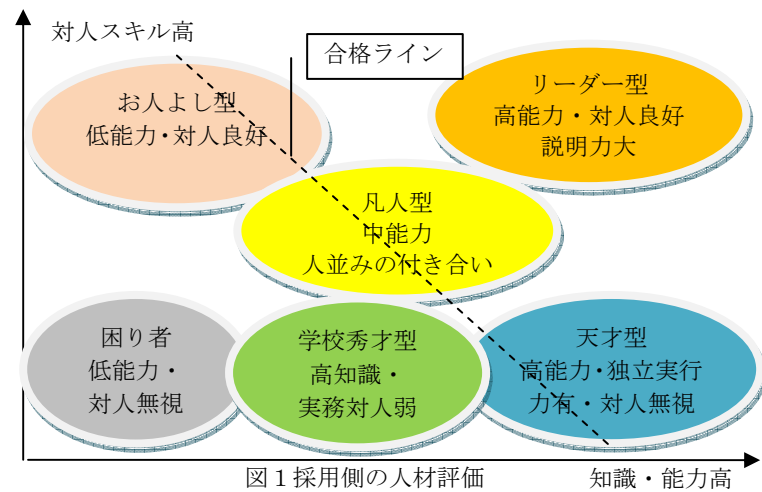


図1 採用側の人材評価

問題事例

大学の経営学部の卒業生が、自分の仕事に関して「この分野はPPMの『負け犬』だからする価値がない。」と発言した。(実は重要顧客の主要部品なので撤退はできない)彼は、学生時代の成績は優秀だが、同期入社の人たちや、先輩との個人的な付き合いは少なく、助言するものもない。さらに、実務面でも社内の経理諸表を見ても、教科書と違うので理解できていない。従って「総合職の癖に！」と嫌われ者である。

2. 学校側の誤解

学校側の誤解の一つは、学校は素材提供であり、学問知識は一つの部品である。その活用は採用した企業の側で育てる。(これは採用側の昔の姿勢でもある)

学問には物理学を理想とする、理論世界での完結性を重視する発想がある。しかし現実社会での適用には、物理学を基礎とする工学でもモデル化のため、種々の近似や抽象化、そして誤差の対策をした。(このような設計は企業内で教えていた)

3. 学校教育に欠けているもの

採用側が求める、リーダー型のコミュニケーション能力は、学校教育の場において身に付けることが難しい。その理由は以下のとおりである。

- ・学校教育においては完成された知識体系の習得に注力
- ・研究の場でも与えられたテーマに対応するものが多い
- ・スキルの繰り返しの習得という体験が少ない
- ・現実の観察より教科書的・理想の世界での思考が中心
- ・現実的な複雑系に対応する総合力が弱い

4. 採用側が本当に求めるもの

投資回収の見込みがあれば、企業は投資する。対人スキルのある程度の障害や、説明能力や総合的思考法に関して欠けるものがあるとしても、この先に身に付けて成長する可能性を見れば採用する。一方、知識・能力が低くても、対人スキルが高くサポート役に徹すれば活躍するとみれば、これも採用対象になる。ただし、従来と比べて企業側の余裕も少なくなっており、できる限り完成度の高い人材を採用する傾向になっている。また、入社後の育成に関しても、選択と集中で、成功可能性のある人材に、教育投資を集中する傾向がある。

5. 企業での対応

上述のように、完成度が高い人材が、入手できればそれに越したことはないが、上記のように大学側もそこに対応できないことが多い。このため、企業の側では、採用後の人材開発を行い、リーダー型の人材を育てることになる。

そのため、基礎知識がしっかりして地頭の良い人財を採用し、その上で図1の「リーダー型」に育成する。ただ現状は、育成手段が整備できていないことも多く、業務を通じて「先輩の真似をしながら育つ」という形となることも少なくない。

したがって、対人スキルが低い、いわゆる「付き合いの悪い」者が不利になることが少なくない。

6. 採用される側の対策

企業の人材開発が、「選択と集中」に向かっているので、**選択される人財になる**ことが重要である。

そのためには、自らが今まで学んできた知識を、実務の上で生かせることを示すことが、地頭の良さをPRするためにも重要である。ここで、今まで習得した理論的な知識を、現実的な問題に適用するための考え方として、図2の手法を提案する。

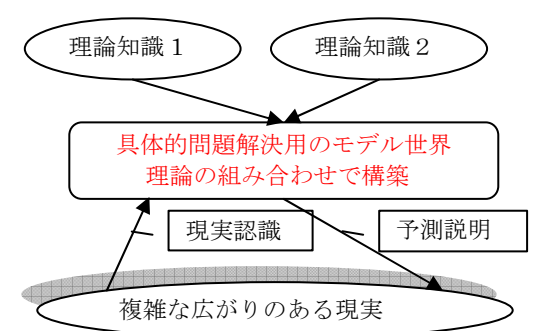


図2 現実問題に知識を適用

7. 仕事に向き合う姿勢

採用された後でも、仕事に向き合うとき、知識を適切に使うことが大事である。

『今までの蓄積に対して敬意を払い、常に仕事の意味を考えて、自分の知識で説明、予測できないか試みる。』

このような謙虚さと、理想に向う心のバランスが重要である。また自分が考えていることを、いかにして他人に分かってもらえるか、このための努力を常に行う必要がある。

8. 対人スキルが低い人の心がけること

他人の感情を察知し、適宜対応するスキルは、子供の時から友達付き合いや、学生時代の部活などで、蓄積したものが大きい。

しかし、このようなスキルが低くても、最低限のこととして、

「他人の価値観や思考形態は違う」

ということを配慮するだけでも、かなりのトラブルは避けることができる。

文化人類学を学べば、多様な価値観に適応することの大切さなどが分かるが、少なくとも歴史を学ぶときその時代背景を考慮するだけでも、この訓練となる。